

# 体系・能力・アイデンティティ



総合活動型日本語教育の成立と変容

言語文化教育研究会

シリーズ「言語教育とアイデンティティ」第6回

2011年7月29日(金) 早稲田大学22号館8F会議室

細川 英雄

早稲田大学大学院日本語教育研究科

# 体系・能力・アイデンティティ

## 総合活動型日本語教育の成立と変容

- はじめに 今、なぜ総合活動型日本語教育か
- 1 体系としてのことばと教育 **1979-1984**
- 2 体系は学習者の中に **1986—1994**
- 3 「学習者主体」の環境とは何か **1995-2001**
- 4 「個の文化」から個と社会の関係へ **2002-2006**
- 5 アイデンティティへの注目 **2007-2011**
- 6 総合活動型日本語教育の位置づけと課題

# 体系・能力・アイデンティティ

## 総合活動型日本語教育の成立と変容

- はじめに 今、なぜ総合活動型日本語教育か
- なぜ生まれたか
- どのように変容したか
- そこにどんな意味があるのか
- これからどこへ行くのか

# 1 体系としてのことばと教育 1979—1981

## —直接問答法に出会う

- **1982** 直接問答法(木村宗男の模擬授業)
- 言語の体系は教師の中にある。
- どのようにして学習者に体得させるか。
- 知識を学習者の身体に埋め込む方法
- 学習者自身の気づかないように
- 学習の確認・定着としての教科書
- **80**年代以降の日本語教育との乖離(かいり)

## 2 体系は学習者の中に 1986—1994 —文化の体系はどこにあるか

- 日本事情との出会い(留学生Iの成長)
- 文化とは何か、文化の体系はどこにあるか
- 体系は動的、教師はすべて把握できない
- 文化を網羅的に記述することの限界
- 学習者自身が気づき、意識化すること
- 文化は体験として個人の中で起こる
- この個人の能力をどう育成するかを考えよう

### 3 「学習者主体」の環境とは何か 1995-2001 —「個の文化」と「学習者主体」

- 総合活動型日本語教育はじまる**1998**
- 「社会文化能力」に対する「個の文化」
- 自分とテーマとの関係（自分の問題として捉える）：  
一般論・ステレオタイプからの脱却
- 「学習者中心」に対する「学習者主体」
- コミュニケーション能力育成としてのコミュニカティブ・アプローチ→タスク、ロール・プレイ
- 個人の「考えていること」を素材とする＝正解のない教室活動、その環境とは？

## 4 「個の文化」から個と社会の関係へ 2002-2006 —対話・コミュニケーションの先にあるもの

- 学習者の「考えていること」を素材とすること⇔教室コミュニティをつくるということ
- 個と社会の関係 (M.Byram 2004)
- 言語活動は教えられない→教えるべきではない
- 環境基盤としての対話・コミュニケーション、その先にあるものは？
- コミュニケーション能力は育成できるのか？→その目的化への疑問

## 5 アイデンティティへの注目 2007－2011

－個の生成に立ち会うということ

- 自分誌活動の可能性、ポートフォリオの意味
- 個人のアイデンティティ生成に立ち会う(細川**2008**)、
- 活動内容への注目＝個人にとってかけがえのないものとしてのテーマ
- テーマ発見と居場所としてのアイデンティティ生成
- 個人のコミュニケーション能力育成を目的化しない

## 6 総合活動型日本語教育の位置づけと課題

- 行為者としての生きるテーマの発見と意識化
- 他者及びコミュニティ・社会とのつながりを実感できるような、ことばの活動環境の組織化(予備的・準備的ではなく)
- あらゆる分野・領域の基本としての全体総合的言語活動観(ことばの生活の充実を原点に置く)
- 社会における真の個人主義(深く考え、決して寄りかからず、遠いまなざし、ゆるやかな連帯)をめざす、新しい言語活動教育の確立

# 体系・能力・アイデンティティ

総合活動型日本語教育の成立と変容



ありがとうございました。

言語文化教育研究会

シリーズ「言語教育とアイデンティティ」第6回

細川英雄

早稲田大学大学院日本語教育研究科